

# 達成困難な課題遂行時における 有効な支援方法に関する実験的検討

—自己肯定感情、課題パフォーマンスの観点から—

○塩崎智美<sup>1</sup>・田中秀樹<sup>2</sup>・井森本修充<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>広島国際大学大学院心理科学研究科, <sup>2</sup>広島国際大学心理学部)

## 問題・目的

心理療法の提供において、セラピストへの依存はクライアントの独り立ちを妨げる。一般に高困難度事態ではパフォーマンスは低下し(Atkinson, 1974; Yerkes & Dotson, 1908), 自己肯定感情も低下する恐れがある(篠田他, 1998)。したがって、精神疾患の治療のような高困難度事態において、独り立ちの際に不可欠な自己肯定感情を損ねず、同時に治療効果も高くするには、他者からのサポートが必要であると考えられる。自己肯定感情については、励ましや慰めが肯定的な認知を促進する(浜名・北山, 1988)一方、情報は正当性が強調されると負担となる(市川他, 2016)ことから、励ましや慰めを受け取ると保てるが、情報のみでは保てなくなることが考えられる。一方、課題の困難度・達成度も自己肯定感情に影響を与えることが指摘されている(市村他, 2016; 大谷他, 2012; Park et al., 2007)。パフォーマンスについては発達に伴い能力に原因帰属するようになるため(Nicholls, 1979), 能力を補う情報が与えられた際にパフォーマンスが高くなることが推測される。

本研究では、達成困難な課題遂行時における有効な支援方法について、自己肯定感情、パフォーマンスの視点から検討することを目的とした。

## 方法

**対象** 同意の得られた大学生 78名(男性 36名, 女性 42名, 20.4±1.14歳)

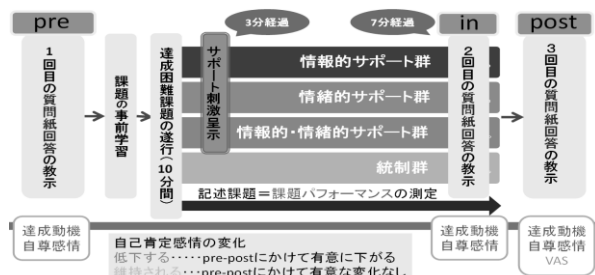


図 1. 実験プロトコル

**分析方法** 達成動機および自尊感情は群別の変化を 2 要因分散分析, 課題パフォーマンスは情報要因と情緒要因の 2 要因分散分析を実施。

## 結果・考察

**達成動機** 単純主効果の検定の結果全群維持された。結果より、「最後までやり遂げた」という遂行努力が維持要因であることが示唆される。

**自尊感情** サポートの時間の主効果があり ( $p < .01$ ), 交互作用が有意傾向であった。単純主効果の検定の結果, Control 群は低下する傾向が見られ, I&E 群は維持された。Emo 群と Info 群について, pre の自尊感情の高さを交絡として再度分析を行った。Emo 群は, 低群は維持されたが, 高群において有意に低下し, 有意に上昇した。Info 群は, 低群は維持されたが, 高群において有意に低下した。結果より, 達成困難事態では両サポートが必要であり, 情報のみでは自尊感情を損なうことが示唆される。また, 特に励ましや慰めは自尊感情の回復要因である可能性がある。

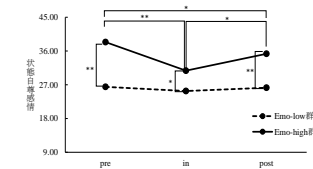


Figure 1. Emo群のpreの状態自尊感情別の状態自尊感情の変化

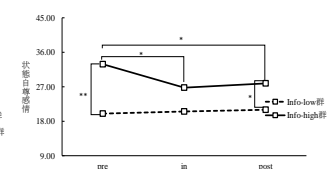


Figure 2. 状態自尊感情を従属変数としたInfo群の2元配置分散分析

**課題パフォーマンス** サポート 1 要因で分散分析を行った結果, I&E 群のみ Control 群より有意に高かった ( $p < .05$ ) ため, 交互作用を想定して再度分析を行った結果, 情報の主効果のみ認められた ( $p < .01$ )。結果より, パフォーマンスは情報を与えることによって向上することが示唆される。

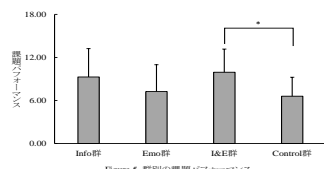


Figure 5. 群別の課題パフォーマンス

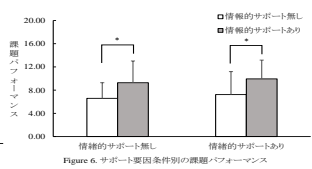


Figure 6. サポート要因条件別の課題パフォーマンス

以上より, 達成困難事態では情報提供によりパフォーマンスは改善するが, 情報のみでは自己肯定感情を損なう可能性がある。達成困難事態における支援として, 適切な情報提供に加え, 励ましや慰めを行うことが重要であることが示唆された。

## 引用・参考文献

市村・上田・楠見(2016). 心理学研究, 87, 262-272.